

## 今号のひと

アベックス産業株式会社 代表取締役

学術博士 元木 貢氏



今号でご紹介しますのは、1977年に2代目社長に就任されはや40年。その間、同業界の様々な団体の役職を歴任してこられ、平成29年春の叙勲で生活衛生功勞により旭日双光章を授章された、アベックス産業(株)代表取締役の元木 貢氏です。また氏は、2008年に麻布大学にて学術博士号(環境保健学)を取得されるという博識ある業界人です。そんな企業の代表であり博士でもある氏にスポットを当てました。

—まず最初に、2代目就任の決心をされた時の心のお聞かせください。

**元木:** 私の父は東京高等商船学校(現海洋大学)を卒業、海軍少尉として応召、南方戦線に従軍しました。戦後、進駐軍の昆虫学者に出会ったのをきっかけに害虫駆除(英語でベストコントロールといいます)の仕事を始めました。まだ日本では殺虫剤は出回っていない頃で、この業界では草分けでした。1964年の東京オリンピックでは、同業組合を立ち上げてオリンピック施設の害虫駆除を受注しています。その後、全国の同業協会の組織作りに奔走し、初代の協会長に就任しました。学生時代から父の背中を見ており、アルバイトで害虫駆除の仕事を手伝いました。もともと机に座って決まった仕事をするのが大嫌い、考えることが大好きでしたので、ベストコントロールの仕事はとても新鮮に思えました。どんな虫がどこから入ってきてどこで繁殖するのか、生態を知り、推理する仕事なのです。卒業後、何のためらいもなく父の会社に入社しました。父が57才の時、後を任せられました。責任感とともにこれからは自分で好きなことができると身の引き締まる思いだったことを思い出します。

—博士号を取ろうと思われたのはどのようなきっかけからでしょうか。

**元木:** 商学部出身でしたので、昆虫学の勉強が必要だとのことで、留学したらどうかという話が出ました。前述の米軍の昆虫学者に相談したところ、日本にすばらしい学者がいるので紹介しようということになりました。それが佐々学博士でした。東京帝国大学医学部卒業後、軍医として南太平洋に従軍、蚊が媒介するマラリアの惨状を目のあたりにして、戦争中にマラリアを媒介するハマダラカの研究が必要であることを軍部に進言し、自ら研究に携わったそうです。終戦後は東京大学に戻り、そのころまだ日本に蔓延していたマラリア、フィラリア、日本脳炎、ツツガムシ病など動物媒介性の病気を次々に撲滅されました。在学中の夏に岡山で日本脳炎の研究にアルバイトで参加させていただきました。蚊との出会いは初めてでした。入社と同時に医科学研究所の研究生として約1年間勉強させていただきました。昆虫学の勉強よりも、研究者とのお付き合いがその後の学会と業界との密接な連携、学位取得に繋がったものと思います。

—最後に、御社及び業界の将来についてお話し下さい。

**元木:** ベストコントロールの仕事は、人の健康と財産(シロアリやネズミは家を壊したり、火災を起こしたりします)を守るなくてはならない仕事です。以前は保健所の職員が駆除や伝染病の消毒作業を行っていましたが、法律が変わって駆除の専門家を置かなくなりました。そこで、市民の害虫相談、感染症の消毒作業、デング熱を媒介する蚊の駆除作業や調査、高病原性鳥インフルエンザ発生時の車両消毒作業などに各地のベストコントロール協会が行政に替わって実務を担当しています。東日本大震災では津波により流された冷凍魚から大量のハエが発生、全国から延べ1万人が動員されハエ駆除作業に当たりました。つい最近のヒアリの調査と駆除作業にも各地の協会が協力しています。

これからはベストコントロールの仕事がもっと社会に浸透し、一般家庭や飲食店が手軽に頼めるような努力が必要だと思います。